

第3回ちょうふ福祉実践フォーラム報告書

福祉現場の文化を創る担い手とは？
～現場を変える、私が変わる～



～とある日の、福祉人材育成センターの空～

社会福祉法人 調布市社会福祉協議会
調布市福祉人材育成センター

目 次

・「第3回ちょうふ福祉実践フォーラム 福祉現場の文化を創る担い手とは？～現場を変える、私が変わる～」 報告書作成にあたって	1
【基調講演】	
・「子どもたちの“楽しい”のために～公立中学校のチャレンジ」 西郷 孝彦（世田谷区立桜丘中学校長）	2
【第一分科会「新たな価値を創造するチャレンジ」】	
・「好きな仕事をする」から「脱福祉」へのチャレンジ 名古屋 一（NPO 法人ファーストステップ）	7
・「調布学園における地域福祉に関する実践」 山下 千晶（社会福祉法人六踏園児童養護施設調布学園）	8
・「調布学園における地域福祉に関する実践」 山下 千晶（社会福祉法人六踏園児童養護施設調布学園）	10
【第二分科会「人と人をつなぐチャレンジ」】	
・「産後うつ・自殺・虐待予防策としての子育てカフェ運営の実践」 杉山 裕子（NPO 法人ちょうふ子育てネットワーク・ちょこネット）	13
・「地域活動における団体連携の重要性に関する実践」 池野上 昇（居宅介護支援事業所ファーストケア調布）	14
・「地域活動における団体連携の重要性に関する実践」 池野上 昇（居宅介護支援事業所ファーストケア調布）	16
【シンポジウム】	
・「福祉の現場文化のチェンジ（変革）を創るチャレンジャー（挑戦者）とは誰か？～「私」から始まる「私たち」のチャレンジとチェンジ～」 ファシリテーター：結城 俊哉（立教大学コミュニティ福祉学部） シンポジスト：進藤 美左（NPO 法人調布心身障害児・者親の会） 小幡 真也（医療法人社団桐光会フロリアル調布） 遠藤 嘉浩（調布市こころの健康支援センター）	18
【巻末資料】	
・第3回ちょうふ福祉実践フォーラム実施概要	28
・第3回ちょうふ福祉実践フォーラム企画会議メンバー	30

※敬称略

第3回ちょうふ福祉実践フォーラム
福祉現場の文化を創る担い手とは？～現場を変える、私が変わる～
報告書作成にあたって

この報告書は、令和2年2月9日（日）に実施された「第3回ちょうふ福祉実践フォーラム」を振り返り、このイベントを発展的に継続するためにまとめたものです。

第3回目を迎えたフォーラムのタイトルは「福祉現場の文化を創る担い手とは？～現場を変える、私が変わる～」です。私たちはこのタイトルに次のような意味を込めました。

残念ながら福祉施設における障がい者や高齢者、児童を対象にした虐待は後を絶ちません。

虐待が起こったり、それに気づいても見過ごしたりしてしまうのは「福祉現場の文化」と言えます。しかし、その福祉現場の文化はいったい誰がどうやって作っているのでしょうか。一度作られた福祉現場の文化は変えることはできないのでしょうか。

私たち企画会議のメンバーは、職員一人ひとりが福祉現場の文化を創る担い手だと考えました。そして、職員一人ひとりの行動の変化が福祉現場の文化の変化につながっていく、つまり現場を変えることと自分自身が変わることは密接につながっていると考えました。

そこで、基調講演では福祉分野に限らずチャレンジをしている方の経験から学ぶために、世田谷区立桜丘中学校長の西郷孝彦先生をお招きしました。西郷先生は、全ての生徒が3年間楽しく過ごせるようにするための工夫や実践の数々をお話ししてくださいました。西郷先生は生徒一人ひとりの多様性を認め、それぞれの興味や関心に自然体で寄り添っており、その実践は福祉職員としても多いに共感できるものでした。

「現場を変える」というと困難なものに感じられ、躊躇したり、諦めたりしてしまいがちですが、身近な他者のチャレンジを聞くことで勇気づけられることもあります。分科会では市内で活動している方から、「新たな価値を創造するチャレンジ」、「人と人をつなぐチャレンジ」というテーマで実践報告があり、参加者からは「元気をいただいた」「明日への活力になりました」という感想をいただきました。

また、職場には「変えなくてもいいこと」、「大事にしたいこと」もたくさんあると思います。ワークショップでは、日々何気なく行われている良い実践に焦点を当てて、自分たちの実践の意義を見つめ直し、他者と共有する作業を行いました。参加者からは「プラスのことに目を向けられた」「これからのことを前向きに考えられた」という感想をいただきました。

福祉現場の文化を創る担い手は、私たち福祉職員一人ひとりです。この報告書を手にとる皆様とともに、福祉現場の文化をさらに成熟させていけることを願っています。

第3回ちょうふ福祉実践フォーラム企画会議メンバー一同

基調講演

「子どもたちの‘楽しい’のために～公立中学校のチャレンジ～」

西郷 孝彦
(世田谷区立桜丘中学校長)



桜丘中学校のホームページ

桜丘中学校のホームページをご覧ください。デジタル教科書と言って、音声付きのデジタル教科書の案内が掲載されています。読み書きに障害があったり、弱視で見えにくかったり、通常の紙の教科書だと理解が困難な生徒が使用できるようになっています。

また、生徒会で古本を集めて、それをお金に換えて、世界の学校に通えない子どもたちの支援をする取り組みをしています。

国際フォーラムというイベントの案内も掲載されていますね。

自由な登校

桜丘中学校では制服を着用しなければいけないきまりがありません。自分たちの思い思いの恰好で登校してきます。門もいくつかありますが、好きな門から登校していいようにしています。以前は、登校は正門からというきまりがありましたが、今は家にいちばん近い門から入れるようにしています。

服装が自由なことで、感覚過敏がある生徒や特定のもののしか着用しないというこだわりがある生徒も、自分たちの好きな恰好で登校できます。例えば、長靴でないと外出できないという生徒は、運動靴で登校するという決まりがあったら登校できません。服装を自由なことで登校できる子が増えたのです。教員にとっても、服装を自由にしたことでチェックする必要がなくなりました。その時間を本来の教材研究などに使うことができます。

職員室前や廊下に並んだ机

職員室の前の廊下に机を並べているので、教室に入れない生徒は廊下で勉強しています。また、廊下の机は学年もクラスも関係なくいろんな生徒が交流する場にもなったり、教室に入れない生徒の居場所になったりしています。また職員室前の机は試験前の勉強などにも使われていて、わからないところがあるとすぐに職員室に行って質問することができます。試験前だけでなく、毎日ここで勉強する子も現れました。そのなかには、難関高校に合格した子もいます。

教室だけでなく、いろんな場所に居心地がいいと思える場所を作っているのです。不登校の問題を抱えていても、こうした工夫によって学校に通えるようになった生徒が沢山います。

麻雀を持ってきた生徒

ある日一人の生徒が家から「麻雀牌」を持ってきました。普通なら「麻雀は持ってこないように」と言うのですが、ここでは「この子は麻雀をやってみたいんだ」と捉え、学校でやらせてあげ

ることにしました。そこで、学校にあるテーブルや毛布を組み合わせて「麻雀卓」を作りました。

メンバーは麻雀牌を持ってきた生徒のほかに、女子バレーボール部のエースや廊下によくいる生徒など、ちょっと変わったメンバーです。

その後ろには教員がいて、あれこれアドバイスをしています。教員の方が「あれきれ、これきれ」と指示し、熱くなってしまう場面もあります。生徒も教員も一丸になって楽しんでいるのです。

屋上からドローンを飛ばす

教室に入れない子どもたちと一緒に学校の屋上からドローンを飛ばして、空撮したこともあります。校長の許可があれば学校の敷地内でドローンは飛ばすことができます。

また、インスタ映えする写真を撮ろうと、屋上でジャンプする写真を撮りました。今の子どもたちは写真のセンスがものすごくあるんですね。

ポカリダンスに応募

去年は「ポカリダンス」をやりたいという生徒がいて、校内でダンスを踊り撮影をしました。最初は私も映っていたのですが、老人ホームのようだとカットされてしまいました(笑)。結果は見事に準グランプリを受賞し、賞金5万円をもらっています。

Pepper 君を活用したプログラミング教育

Pepper 君を導入し、プログラミング教育にも力を入れています。購入すると高額になりますが、企業にお願いし、研究対象になるなどの条件で借りしています。

3Dソフト

この3D-CADのソフトを私がマスターするのに1週間かかったんですが、子どもたちはどれくらいかかったと思いますか。何と10分～20分です。

今の子どもたちは小さいころからデジタルネイティブな環境で育ってきているので、習得が早いんですね。

ファーストレゴリーグへの挑戦

ファーストレゴリーグは小学生から参加できる世界的なロボット大会です。日本でも競技会が開催され良い成績を収めたチームは世界大会に出場できます。桜丘中学チームは中学生ながら世界大会を目指しています。

フリーWi-Fi 完備

校内はフリーWi-Fi にしています。スマホやタブレットは持ち込み OK で自由に使うことができます。

ある生徒が「家でゲームを禁止された」と言うので、「学校でやればいいよ」と勧めました。普通なら学校でゲーム？と思われるかもしれませんが、学校に来づらい生徒には来る楽しみが増えますよね。それでいいと思っています。

ギター教室や料理教室

私はギターや料理が趣味で、ギターは週1回、料理は月1回ほど生徒に教えています。他にもいくつか放課後の活動があり、興味のあるものに参加できることになっています。

ある日ギター教室で「もう終わりの時間だよ」と生徒だと思って声をかけたら、実は先生だったということがありました。廊下の写真でもそうなのですが、生徒と先生の見分けがつきにくいのも、桜丘中学校の特徴だと思います。

子ども食堂（夜の勉強教室）

世田谷区は裕福な土地と思われがちですが、ある調査によると、食事を食べられず困ったことがある子が13%程度いるそうです。また、共働き家庭も多いため、一人で夕食をとる子もたくさんいます。

桜丘中学では子ども食堂もやっています。ただ、子ども食堂という名前だと来づらい子もいるので「夜の勉強教室」という名前にしています。「夕食付きの勉強教室」だとだいぶ参加しやすくなるのではないのでしょうか。勉強がメインで、そこに夕食がついてくる。運営は地域のボランティアの方たちがしています。

夜の勉強教室やギター教室、料理教室などの活動があることで、授業や部活の繰り返しの生活にならず、いろんな人と交流したり、様々な経験をすることができるのです。

浴衣の日やハロウィン

学校は毎日同じルーティンで動いているため、飽きてしまいます。ですので、目先を変えた取り組みを行う工夫をしています。例えば「浴衣の日」は生徒も先生も浴衣を着ていい日。朝早く地域のボランティアの方が来て、学校で着付けをしてくれます。浴衣や草履なども貸し出ししているので、持っていなくても大丈夫です。教員たちもその日は浴衣で授業をします。

「ハロウィン」では、生徒も先生も真剣に仮装しています。

さくらフェスティバル

桜丘中学校の文化祭を「さくらフェスティバル」と言います。生徒だけではなく、地域の人や NPO などいろいろな人がステージ発表や模擬店に参加しています。当日は2000人くらいの方が来て、盛り上がりました。

約3割の子は運動会が好きではない

運動会はみんなが楽しみにしているのではなく、実は3割の子は好きではありません。ですので、どうやったらみんなが楽しめる運動会になるか考えました。

そこで、競技に玉入れを導入しました。玉入れは他の競技に比べて上手い下手が出にくい競技です。そうしたら、運動嫌いな生徒まで自主的に練習するようになったのです。また、部活対抗リレーというのをはじめました。ユニフォームを着て本気で走る部もあれば、文化部などは仮装してPRしながら走ったりして、運動会は盛り上がります。

定期テストの廃止と成績

定期テストはなく、ミルフィーユテストと言って小テストを導入しています。定期テストで100

点をとれなくても、10点満点の小テストを10回実施し、10点満点を積み重ねて最終的に100点に達する子もいます。100点の範囲を準備することが難しい生徒も、10点満点だったら、準備できる子はたくさんいます。

もし小テストで満足いく点数をとることができなくても、もう一度同じ範囲のテストを受けることができます。そして、良かった方の点数を残せるようにしています。

成績については自慢になるのですが、桜丘中学校は世田谷区でも上位の方です。特に英語は優秀です。アメリカ大使館の人に来ていただき、英会話の授業をしてもらうこともあります。

掲示物がない教室

教室には掲示物がありません。殺風景に思われるかもしれませんが、掲示物があると集中できなくなる生徒がいるので、掲示しないようにしています。日直の名前も書きません。発達に特性のある子だけでなく、そうではない子でも掲示物が気になる子は多いのです。

また、これもだいぶ前からやっているのですが、椅子の足にテニスボールをかぶせて、聴覚過敏の生徒にも配慮しています。

自然に並んだ机

今日、販売している本（「校則なくした中学校、たったひとつの校長ルール」）の表紙、机の絵が書いてありますが、最初はきれいに並んだ机だったんですね。でも、編集の方が、桜丘中学っぽくしようと、雑然と並んだ机の絵に変えてくれたんです。子どもたちの個性と同じで、机も自然な感じで並んでいます。

チャイムをなくす

また、授業開始や終了のチャイムがありません。聴覚過敏の生徒の中にはチャイムの音が苦手な子も実は多いんです。そういった子にとって、チャイムは耐え難い音のことがあります。私も、絶対音感はありませんが、チャイムのピッチがずれていたりするとものすごく気になって、ずっと耳

に残ってしまうことがあります。

また、チャイムをなくし、ゆるく授業をスタートすることで、遅刻の生徒が教室に入りやすくなるという効果もあります。チャイムがなくてもほとんどの生徒は時間通りに登校して、授業時間には席についています。

授業中に居眠りしてもいい

桜丘中学校では授業中に生徒が居眠りしていても注意しません。むしろ 20 分くらい居眠りした方が、頭が冴えます。仮眠の有効性は科学的にも実証されているのです。国会だって居眠りしている議員はいますし、研修中や会議中に居眠りしている教員だっています。

教員には居眠りされるのが嫌なら、起きていたくなるようなおもしろい授業をなさいと話しています。

生徒でにぎわう校長室

校長室にはたくさんの生徒が来ています。生徒が入りやすいようにドアも開けっ放しにしています。帰国子女の子が英語の授業を受けずに校長室で過ごすこともあります。校長室も生徒の居場所の一つになっています。

目の前の児童を観察すること

インクルーシブ教育って、すごくわかりやすい言葉で言えば、「すべての子どもたちが楽しく過ごせること」だと思います。

子どもたちが幸せに生きる方法ってなんだろうと考えるためには、まずは目の前の子どもたち一人ひとりを観察することが大事です。その子が何を求めているか考えないといけない。自然科学のやり方と同じだと思います。

好きな先生を独占できる「ゆうゆうタイム」

自分の好きな先生と話せる時間が「ゆうゆうタイム」です。

1 対 1 で話をする時間を持つことで何かあったときに相談できる環境を作っておく。それにより虐待やいじめ、学習障害が見つかったこともあり、

セーフティネットの機能も果たしています。

生徒会で決まったことは実現する

生徒会で決まったことはできるだけ実現するようにしています。以前、自動販売機を設置するということが決まり、電気代などの経費の問題があるなと思っていたのですが、生徒がちゃんと調べて、災害用の自販機というのがあることがわかりました。災害用の自販機というのは無料で設置できるのです。

ちゃんとそうやって自分で調べて、考えたり、工夫したりする力がついているんですね。

本を読みながら授業を受ける生徒

ある生徒は本が好きで、ずっと本を読んでいます。授業も本を読みながら聞いていますが、成績はトップクラスです。我々はずい、何かをしながら勉強するというのは集中できなくなるので良くない思いがちですが、そうでない子もいるんです。複数のことを同時にできる子もいて、勉強のスタイルも様々です。この子はこういうスタイルなんだなと受け入れるようにしています。

『みんなの学校』を見て

大阪にある大空小学校を舞台にした『みんなの学校』という映画をご存じでしょうか。発達障害やいろんな特性を抱えた子どもが同じ教室で学んでいる学校で、不登校ゼロを目指しています。

この小学校を卒業した子が安心して通えるような「中学校版みんなの学校」を作ろうと思いました。

桜丘中学校の 4 つの OS (オペレーションシステム)

障害がある子もない子も、学校が楽しく過ごしやすい環境であり、授業がわかりやすいことは当然いいことです。

子どもたちはみんな違ってきますよね。私は「普通の子ども」というのは存在しないと思っています。子どもはみんな違うデコボコ状態。そこにいろいろな施策をただ積み上げてもうまく重なりません。

私は子どもたちのデコボコをそのまま認めることが大事だと考えています。そこで、子どもたちのデコボコを吸収するような、パソコンのOSつまりオペレーティングシステムのようなものが必要だと考えました。

学校教育に必要なOSは以下の4つです。

- 1 多様性の受容、尊重
- 2 愛情を持って生徒に接する
- 3 一人ひとりを大切にする
- 4 子どもとともに生きる

特に1の多様性の受容が大事だと思っています。「みんな違っていい」、「みんな違った方がいい」と多様性を認め合う環境です。

世界を動かすのは変わった子です。ビル・ゲイツ、トム・クルーズ等々、特性を持った人で活躍している人はいっぱいいます。

3の一人ひとりを大切にするですが、私は一人を見られない教員は全体を見ることができないと思っています。「木を見て森を見ず」と言いますが、その逆で木を見ないと森は見えません。「メンター制」と言って、気になる生徒を継続的にみる制度を導入しています。

生徒を見た目で判断しない

最後にこの話をさせてください。少しウェットかもしれませんが、他区から女子生徒が転入してきました。その子は茶髪で派手な見た目だったんです。けど、普通の中学校ならそれだけで悪い子だとレッテルを貼られたでしょう。

しばらく経って先生たちが「あの子いい子ですね」と言ったんです。「明るくてまるで母親のように心配してくれる。他の子から頼りにされています。」と。これを聞いて、本当に嬉しくなりました。容姿に囚われず、本質をみる目がうちの先生には備わってきました。嬉しかったです。

質問

1 保護者からの反対やクレームはありませんか。

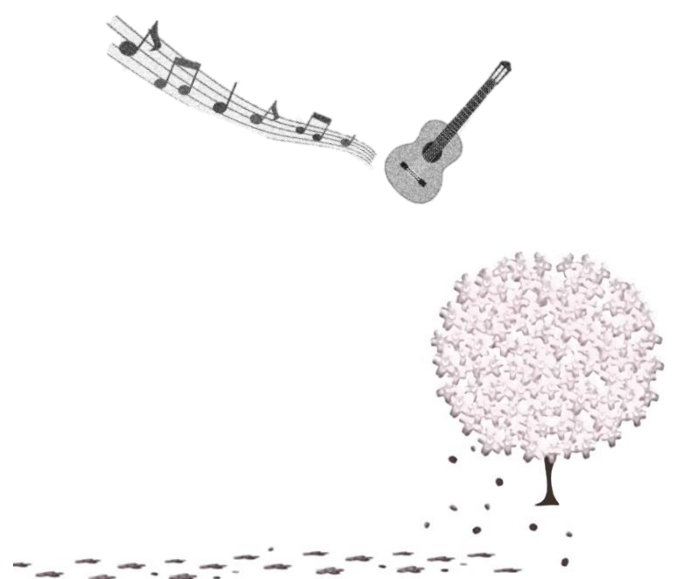
→自分の子どもが楽しく学校に通っているので、クレームを言ってくる保護者はいません。保護者にとっては、子どもが学校に行きたくないというのがいちばん辛いですからね。

2 他の教員に反対されたときはどうしますか。

→桜丘中学の教師の平均年齢は30代で若いんです。これは新規採用の教員を積極的に受け入れるようにしているためです。考え方が違ったり、方針に合わないことがある場合は、異動の制度をうまく活用しています。

3 桜丘中学校のような配慮を受けられる高校はありますか。

→都立高校であれば六本木高校とか、このあたりだと世田谷泉高校でしょうか。あまりわかりません。ただ、私が『みんなの学校』を見てその先の学校を作りたいって思ったように、「高校も作ろう」と思っている人もいるかもしれません。



第一分科会

「新たな価値を創造するチャレンジ」



【概要】

チャレンジとは未経験のことや困難なことに取り組むことを意味します。人の生活の困難な部分を取り扱う「福祉」は、すでにそれだけである種の「チャレンジ」をしているのかもしれませんが。

今回報告してくださったお二人は、「福祉」に「新たな価値を創造する」チャレンジをそれぞれ別の角度から、お話してくださいました。

ファーストステップを立ち上げた名古屋さんは「自分の夢」として作業所でアート作品を商品化することを通じて「イノベーション福祉」を実現するという取り組みを、調布学園の山下さんは「学園の目標」としてクラウドファンディングの活用やボランティアとの連携などを通じて地域に開かれた組織運営を目指す取り組みを報告してくださいました。

お二人の話は福祉関係者に刺激を与え、さらなる新たな価値の創造へと展開していく可能性を生み出しました。

●ファシリテーター：進藤美左（NPO 法人調布心身障害児・者親の会）

○報告者：名古屋一（NPO 法人ファーストステップ）

○報告者：山下千晶（社会福祉法人六踏園 調布学園）

「好きな仕事をする」から「脱福祉」へのチャレンジ 名古屋 ー（NPO法人ファーストステップ）

I. はじめに

○プロフィール

ボランティアとしての福祉の関り

職業としての福祉との関り

○福祉の仕事の楽しさは何？

福祉の仕事に楽しさを感じていますか？

- ・変化を求めない福祉施設への不満を感じたことはありますか
- ・仕事をしていてもワクワクしないことはありませんか

II. 動機、きっかけ

○法人立ち上げの理由

福祉サポーターとしてだけでなく、自分の夢へのチャレンジ

○施設コンセプトをどうするのか

どんな施設を作るのか、活動内容はどうか

- ・自分の夢の振り返り⇒幼少期に「絵を描く仕事がしたい」
- ・健常者は努力次第で学校に行き、デザイン会社等への就職が可能
- ・障がい者は、学校卒業後にほとんどの人が福祉就労で、夢に向けた道に壁。
- ・絵を描くことが好き、絵が得意などの障がい者の思いに向けたのサポート施設。

「好きなことを仕事にする」というコンセプト

- ・作業内容の柱の一つに「アート製作」を設定し、仕事としてアート製作をして報酬を得られる施設づくり。

○施設（ハード面）の検討

作品を展示できるスペースと販売拠点⇒ギャラリーとカフェの運営（1F）

障がい特性に対応した作業種類⇒受注作業（2F）接客（1F）アート製作（2F）

III. 実際の取り組み

○アート製作を柱にした作業内容の検討

○単なる福祉アンテナショップにしない工夫

福祉事業所の自主製品だけを扱っている店では一般客は見込めない

- ・一般的に福祉作業所が運営するアンテナショップは関係者等の来客が多く、ふらっと入店するには敷居が高い。
- ・一般雑貨（北欧食器等）を並列販売することで、福祉事業所自主製品の商品価値

の向上と購買目的の一般化。

- ・店内からできるだけ福祉色を消すことで、一般客の「福祉ショップ」意識を払拭する。

○アート作品販売で工賃は生まれるか

単純に絵を製作し販売をすることで工賃を支払うことは困難。

- ・展示する場所、販売する場所があっても、日本には絵画を購入して楽しむ文化が根付いていない。
- ・作品の値付けの難しさ。

○作品をモチーフにしたアート商品の展開

作品の素材を使った商品製作で重要視したこと

- ・福祉事業所が作った商品、いかにも福祉という商品ではなく、アパレル業界等の商品に負けない「商品力」「デザイン」が必要。
- ・例えば、Tシャツであれば着てもらえることが重要で、部屋着ではなく外出着として来てもらえる商品づくり。
- ・商品に使用する作品の選定、何でもよいからと商品化しない。
- ・作品をどう生かすかが支援者の役目。

IV. 実践から気がついたこと

○「好きなことを仕事にする」の実現に向けて

環境や支援の工夫によって実現が可能

- ・夢実現の旗を揚げたら、利用希望者が数多く入所した。結果、「絵を描きたい」「何か造りたい」と思っている障がい者へのアプローチができ、実際にサポートが実現している。
- ・世間には「好きなことを仕事にしたい」と思っている障がい者が多く存在する。

V. 伝えたいこと

○脱福祉の思想で「福祉」を利用する

福祉の活動は多様化していて、「福祉らしくない福祉」も実現している

- ・福祉（障がい）を前面に出さなくても可能。例）久遠チョコレート（愛知県）ヘラルボニー（岩手県）など
- ・例えば、就労継続支援 B 型事業でどんな活動をしようかという発想ではなく、○がしたいから、福祉を利用して○○事業を始めるという逆転の発想。

○「スタンダード福祉」＋「イノベーション福祉」

現状維持では変わらない福祉

- ・障がい特性に適應したスタンダードな活動も必要。
- ・現場のスタッフと管理者が一緒になって、福祉を変えていく意識。
- ・「福祉だからこれでいい」ではなく、一般企業と戦う意識。
- ・革新的な発想から、新たな福祉戦略にチャレンジ。そして夢を語ろう。

調布学園における地域福祉に関する実践

山下 千晶（児童養護施設 調布学園）

I. はじめに

私は、児童養護施設の調布学園に勤めて9年になります。入職してから、子どもたちが生活を過ごす寮舎の担当職員を務めています。世間的に認知されている児童養護施設の主な仕事内容は、「親代わりとなって子どもたちの衣食住のお世話をすること」とイメージされる方が多いのではないかと思います。確かに、主な仕事内容はその通りですが、入所児童の9割以上は保護者(親)が顕在しています。入所理由は、虐待とりわけネグレクト(育児放棄)を受けてきた児童が多い傾向にあります。戦争孤児の支援から始まった児童養護施設ですが、現代の入所理由は大きく変化しており、入所時の時点でより心に傷を負った児童が多いのが現状です。人に対しての安心感や信頼感を育んでこられなかったため、職員をはじめ、人と関係性を作ることや自分自身が認められた経験や成功体験がない事もあり、自信を持ちづらい児童が多くいます。その中でも、子どもたちは施設に入所して、職員や様々な大人と関わりを持つ中で安心感や信頼感を育み、少しずつ自信を持つことができるようになっていきます。今後、よりケアニーズの高い子どもたちが入所してくることが想定される中で、対職員だけの関わりにとどまらず、様々な「大人」や「地域」の関わりが、子どものよりよい成長を後押しできるのではないかと考えています。

II. 動機、きっかけ

社会福祉法人の大規模化や協働化が示されている中、今後の社会福祉法人の在り方は大きく変化してくると思われます。調布学園としても、児童養護施設の事業を開始して2025年に100周年を迎えます。また、施設全体の建て替え工事を行っています。児童養護施設はどうしても閉鎖的になりやすい分野ではありますが、調布学園は事業計画にも「地域に支えられ、地域に貢献し、地域と共に歩む施設」を目標に掲げ、開かれた施設運営を目指しています。今一度、地域福祉の在り方を整理し、これからの施設運営に励んでいければと思い、今回の報告抄録を作成させて頂きました。

III. 実際の取り組み

調布学園が実際に取り組んでいる一部を紹介させていただきます。

①児童養護施設を理解してもらうために、地域に開かれた施設運営を目指して

夏には盆踊り行事(納涼祭)に地域の方をお招きして、地域の方と一緒に踊ったり、模擬店を楽しんだりします。親子映画会と題して、年2回、映画技師さんに依頼して、映画上映も行っています。野外で行う映画会ということもあり、人気があります。その他にも会議室などスペースの貸し出し、地域の子どもの遊び場など、積極的に地域開放を行ってきています。

②子どもショートステイの取り組み

1992年より、子どもショートステイ事業に取り組んできました。核家族など子育ての家庭基盤の脆弱化と地域関係の希薄化の中で、子どもたちが地域の中で安全・安心に育っていくために「家庭の消防署」としての役割を果たすとともに、虐待の予防効果や家族の分離ではなく、家族が分離をしなくて済むような積極的かつ予防的福祉を追求して取り組んできています。

③ボランティアの受け入れや実習生の受入れ

子どもたちの趣味嗜好は様々です。子ども達ひとりひとりに合った学習支援や興味の幅を広げるためのボランティアさん(ピアノ、英会話、将棋など)を積極的に受け入れています。ボランティア団体としても、中学生に向けて小学6年生の学習会、低学年の学習指導なども通年を通して行って下さっています。ボランティアさんを受け入れることで、子どもたちの力や知識が身につくこともそうですが、さまざま方に児童養護施設を知ってもらうきっかけにも繋がっていると思います。また、社会福祉士や保育士などの実習生を積極的に受け入れ、将来の福祉現場を担う職員の育成にも積極的に取り組んでいます。

④クラウドファンディングの活動

より多くの人にたちに児童養護施設のことを知ってもらうため、建て替え後の子どもたちの生活空間がより充実したものになるために、SNSを活用してクラウドファンディングの活動を実施しました。当初は200万円を目標にしていたましたが、最終的には合計196名の方から363万円という金額を支援していただくことができました。施設で育った卒園生からも、恩返しをしたいということで寄付を頂きました。

IV. 実践から気がついたこと

今一度見直してみると、地域に支えられている事ばかりであると再認識しました。「地域に貢献し、地域と共に歩む施設」の在り方や考え方を早急に整理して、新たな発想とともに、積極的に取り組んでいく必要があると思いました。建て替えもあるため、建物を活かした地域貢献、子育てに関する相談業務など、今、職員が取り組んでいる専門性を活かした地域貢献などを具体化できればと思います。

V. 伝えたいこと

余談ですが、入所している子どもたちはさまざまな生い立ちを抱えながらも、たくましく懸命に生きていこうとしています。入所している児童の大半は、児童養護施設で生活していることを知られたくないと話しています。その背景には、家族と一緒に生活できない自分を他者に知られることを隠したいのと同じくらいに、児童養護施設のことを世間の人達がよく知らないと思うからだそうです。学校やアルバイト先などの社会で、障がい者施設なの？何か悪いことをして入った施設なの？と聞かれることがあるそうです。閉鎖されがちな分野ですが、地域活動を通して開かれた施設を目指し、より多くの人に児童養護施設を知ってもらえるよう発信をすることで、たくさんの理解者や支援者ができ、子どもたちにとって、今よりもよりよい支援や後押しをしてあげられるのではないかと思います。



**ファーストステップ
外観の様子**

**Gallery&Cafe
Pedalo**



**広々とした遊び場がある
緑豊かな調布学園の外観**



**多職種が連携して創りあげた
「ちようふ高齢者応援大会」
(居宅介護支援事業所ファーストケア調布)**



第二分科会

「人と人をつなぐチャレンジ」



【概要】

人の生活は複雑、多様化しており、その生活ニーズを支えるためには複数の機関や人が協働して関わる必要があります。

今回発表してくださった杉山さんは、ご自身の子育て中の体験から異世代交流の場であるカフェ「aona」と調布子育て応援サイト「コサイト」を立ち上げ、子育て世代が孤独に陥らないよう人と人をつなぐ支援をしてきました。もう一人の発表者の池野上さんは、よりよい利用者支援のために、多職種の連携の強化が必要と考え、イベントを実施することを通じて、多職種をつなげていきました。

お二人の実践からは関係者や関係機関が縦割りにならず連携していくことと意図的に人と人をつないでいくことの重要性が示唆されました。

●ファシリテーター：小幡真也（医療法人社団桐光会 フロリール調布）

○報告者：杉山裕子（NPO 法人ちょうふ子育てネットワーク・ちょこネット）

○報告者：池野上昇（居宅介護支援事業所ファーストケア調布）

産後うつ・自殺・虐待予防策としての子育てカフェ運営の実践

杉山 裕子（NPO 法人ちょうふ子育てネットワーク・ちょこネット）

I. はじめに

NPO 法人ちょうふ子育てネットワーク・ちょこネットは、「ここで育てたい」街づくりを活動理念としています。ネットワークとは、子育て支援の活動をする個人や団体の集まりで、子育て支援の実践を通じて、課題や問題点を出し合い、常に行政機関と情報を共有できる関係づくりを行っています。

活動には3本の柱があります。

1 学び合いの場づくり <いまコレ部>

市民、企業、行政が同じテーブルで課題について学び、話し合う機会をつくっています。

2 異世代交流の場づくり

カフェ運営を通じて、子育て中の方の居場所と他世代の方との交流を促すことで、孤立することのないようにはたらきかけています。<カフェ「aona」>

3 情報収集・編集・発信 <調布子育て応援サイト「コサイト」>

調布市の行政が発信する子育てに関する情報と街の役立つ情報や子育てが楽しくなる情報をまとめているサイトです。毎日のように情報を更新しています。

II. 動機、きっかけ

立ち上げ者自身の調布での子育て経験から「あったらよかった」と思っていた子育てカフェと情報サイトを作りたいというのがネットワークづくりの動機。きっかけは、子どもの受験のタイミングと勤務先の早期退職です。

III. 実際の取り組み

経験もなく、友達もいない地域で、カフェやサイトを実現するためには、一緒に取り組んでくれる人と知り合うこと、カフェやサイトが必要だと思ってくれる人をたくさん探すことから始めました。

IV. 実践から気がついたこと

自身が子育て中に困っていたことは、多くの親が共通にもつ困難さでした。保育枠の増設が急務の行政課題であった調布市職員に、預かり以外の子育て支援策として、カフェやサイトの必要性を理解して、その実現のために動いてくださる方がいらっしゃるのだという事に感動しました。

ネットワークづくりのおかげで、立ち上げ期は、余暇を使って「手伝い」をしてくださる方が、大きな力となってくださいました。事業継続には、「プロ意識をもって仕事に従

事する人」が必要でした。助成金にばかり頼らないため、民間の飲食店やサイト運営者と同じように経営努力を行うなか、子育て中の人や子育て支援に携わりたいと考える人が働く場を提供することを同時に行うことがとても困難で、現在も大きな課題です。

V. 伝えたいこと

短時間労働者の組み合わせで、効率よく、質の高いサービスを提供することをどのようにして実現するのか。収益は、子育て中の方から得るべきなのか、それとも、存続について社会的意義を感じてくださる方から得るべきなのか。その両方からバランスよく得ることで、限られた税金を使い切らないようにしたいが、それは実現できるのか。

より多くの方にご一緒にこのことを考えていただき、お知恵を拝借できませんでしょうか。社会的に求められる間は、この事業が存続できるように、できることはすべてやり切りたいと考えています。時代が変わって、今の事業が必要なくなれば、また違う形で子育てを応援したいです。「ここで育てたい」街づくりに寄与できるよう、力を尽くすことが私のライフワークとなりそうです。



acaの店内 くつを脱いでくつろぐ天然木を活かしたインテリア

【ティアラ王冠ハートフルー】



育児中、限られた自分のための時間に腕をあげた、手作り作家さんの作品を展示販売してます。



【フェルトのおもちゃ】



週替わり定食【おから鯖コロッケ】

【離乳食セット】



【子どもカレー夏】

手作りの料理に子育て中の疲れを少しでも癒してほしいとの思いを込めての食事提供。



助産師さんの「抱っことおんぶの練習会」は、お父さんの参加率も高いです。

地域活動における団体連携の重要性に関する実践

池野上 昇（居宅介護支援事業所ファーストケア調布）

I. はじめに

調布市で介護支援専門員として仕事を始めて8年目になります。以前は、杉並区の施設でケアマネをしていました。最初に調布市で仕事している時に感じたことは、ケアマネ同士の交流が少なく、事業所内での連携しかないように思っていました。調布でのケアマネ業務に慣れてくると自分でももう少し色々なやり方や相談方法などを知りたいと思うようになり、自分はこのままで良いのか？ 自分のスキルアップが出来ているかなど、考えることが多くなってきました。日常の業務中にこのままで良いのか考えることが多くなり苦悩の日々を送ることがありました。その中でケアマネ同士の連携や多職種同士の連携をどのように行うことが出来るのか、また、顔の見える関係性の構築について考えました。

II. 動機、きっかけ

ケアマネ同士の連携や多職種連携をどのように行うことが出来るのか、自分なりに考えていたところに、介護支援専門員調布連絡協議会の会長への推薦の依頼の話を頂きました。自分の現段階の力を知りたいとともに必ずスキルアップになると思い、会長になることを決めました。今は、会長に就任して4年が経ちます。最初の1年目は、会長としての苦悩が多くありました。このままの活動で良いのか、役員の考えはどうなのかなど。ただ、会長として市内の他団体と交流を持つことが出来るようになり、他団体からの意見も多く頂くことが出来るようになりました。この時に感じたことは、【他団体も色々な団体と連携を取りたがっている】と感じました。各団体もどのように連携を図ることが出来るのか、他団体との連携を密に取るためにどのような方法があるのかと検討をしているのではないかと思います。また、各団体ともに研修会や勉強会など行っており、充実した内容で活動を行うことが出来ているが、ここに多職種連携を入れることによりさらに研修会や勉強会に深みが出るのではないかと思います。何かその時にこのままではいけないのではないかと自分の中に強く思ったことを今も忘れることは出来ません。

III. 実際の取り組み

介護支援専門員調布連絡協議会の会長として以下の内容が、私が会長として2年目から行った活動です。

- ①協議会に2つの部会を設立した。①地域連携強化部会、②入退院時の連携シート部会
- ②部会の設立により役員の組織化を図った。組織化することにより役員としての役割や役員としての自覚を図ることを目的にした。
- ③地域連携部会により他団体との会議を行う。その中で地域課題を抽出する。
- ④入退院時の連携シート部会により調布市・狛江市・三鷹市の病院に連携シート作成のためのご協力を行った。また、そのための会議を行う。

- ⑤地域課題に対して各団体と会議を重ね、1 日型研修会の実施を行う。
- ⑥入退院時連携シートを作成して勉強会等行い地域ケアマネ・包括支援センター・病院に周知する。
- ⑦主任ケアマネ部会の設立・部会の組織化を図る。
- ⑧1 日型研修会【ちょうふ高齢者応援大会】を実施する。

IV. 実践から気がついたこと

調布市の医師会・歯科医師会・薬剤師会・介護保険サービス事業者・地域リハビリテーション・ゆうあい福祉公社・認知症疾患医療センターの団体の代表と何度も会議を行うことにより、市民・専門職の福祉に対する意識やスキルアップのために各団体同士が一つになり何かを行うことになった。それが、1 日型研修会【ちょうふ高齢者応援大会】になりました。このように各団体が一つとなり実施する研修会は、調布市内では全くない事でした。準備段階で何度も小会議を行い、その後、本会議を行うなど、普段の業務多忙の中、各団体の代表が集まり会議を行う時のモチベーションの高さには驚きました。また、その時に同じ目標に向けて連携を取ることが出来ていると感じました。もちろん、その過程には、色々な意見や考えがありましたが、全てが同じ目標・同じ道・同じ方向に向いていたものでした。そのため、各団体の全力の協力の上、高齢者応援大会を実施することが出来ました。第 1 回の参加人数は、160 名以上でしたが、今回第 2 回の大会は、市役所・地域包括支援センター・市内の各会の協力参加もあり、220 名以上の市民・専門職の参加がありました。大会終了後の懇親会では、各団体の代表者・協力参加者の笑顔は今でも忘れることが出来ません。また、一団体では出来ないことも、このように各団体が一つになることで今まで行うことが出来なかったことが、このように盛大に行うことが出来ることを実感した時でした。

V. 伝えたいこと

一つの目標に向けて共に行動することの素晴らしさ、また、1 + 1 が 2 ではなく、無限の力になることを実感できました。全てが同じ目標・同じ道・同じ方向に整えるまでの時間や会話がとても大切です。その時間の過ごし方により大きなことが出来ると感じました。私も今回の経験を生かし日々の業務に役立てることが出来ています。また、各団体・市民の皆様ともに調布市でいつまでも生活を送りたい・仕事をしていきたいと考えており、一緒に協働したいと思っているのではないのでしょうか。ただ、地域課題は、まだまだ多くあります。ちょうふ高齢者応援会を継続してこの課題について皆さんと考え・行動・評価をしながら、テーマとして「安心して暮らそう わが街ちょうふ」を掲げていきたいと思っています。最後に多職種連携について日々大変な思いをしているかと思いますが、市役所・調布市内の各団体、同じ土俵にのり上下関係なく多職種連携を大切に考えていることを覚えていてほしいです。

シンポジウム

「福祉の現場文化のチェンジ（変革）を創るチャレンジャー（挑戦者）とは誰か？
「私」から始まる「私たち」のチェンジとチェンジ～」

●ファシリテーター：結城俊哉

（立教大学コミュニティ福祉学部）

○シンポジスト：進藤美左

（NPO 法人調布心身障害者・児親の会）

○シンポジスト：小幡真也

（医療法人社団桐光会フロリアル調布）

○シンポジスト：遠藤嘉浩

（調布市こころの健康支援センター）

※敬称略



～分科会・ワークショップの振り返り～

結城：みなさん大変お疲れさまでした。第3回目のフォーラムは「福祉現場の文化を創る担い手とは？～現場を変える、私が変わる～」というテーマでしたけれども、いかがでしたでしょうか。

これから、このシンポジウムでは、第一分科会、第二分科会、ワークショップの内容のご報告をいただいて、参加者のみなさんとそれぞれの体験を共有する時間としたいと思います。

それでは、第一分科会の進藤さんからお願いします。

進藤：第一分科会の報告をさせていただきます。第一分科会は「新たな価値を創造するチャレンジ」ということで、お一人目はファーストステップの名古屋さんにご報告いただきました。

名古屋さんは狛江の出身で中学の時に調布に引っ越してこられ、高校生ぐらいの時に手話に興味をもち聴覚障害の方とお友達になりたいと思ったのが福祉に接する最初のきっかけでした。またお父様が仕事に事故にあい、車いすの生活になったことで、周りに身体障害の方がたくさんいたという環境がありましたので、まずボランティア活動として手話サークルから始めて、そこから知的障害や身体障害の方との関係を持ち始めました。

20代半ばころから調布市希望の家に勤め、そのあとは東京都の施設などの職員になり、自分の思う福祉を実現したい、自分の夢中になれる夢にむかって何かできるものはないか考えて、2016年にファーストステップを立ち上げました。

名古屋さんは元々絵が好きだったこともあり、絵を描きたい何かを作りたいという障害者をサポートしようと思われたそうです。それで好きな仕事をして報酬を得るしくみを作ってサポートされています。

ファーストステップ（就労B）は染地にあるのですが、1階がカフェになっています。去年の9月には飛田給に生活介護施設も開所し、多機能型の施設になっています。

カフェにはギャラリーが併設されていて、作業所の製品を北欧食器などと一緒に並べることでより普通の雑貨として手に取ってもらえるようにする工夫をされています。

ただ、絵画などのアート作品については、日本では絵を飾るという文化がないことや、絵の値付けが難しいなどの課題がありますので、手に取りやすいものに商品を変えてしまおうということで街中でも着られるデザインのTシャツや、トートバック、クリアファイルとして商品化して販売しています。

名古屋さんの思いの中に「福祉」っぽくしたくない、けれども福祉の事業をしているので福祉をうまく利用しようという逆転の発想があるのが印象的でした。全国でもそういった福祉っぽくない取り組みをしている団体がありまして、「久遠チョコレート」と「ヘラルボニー」という団体のご紹介がありました。

こういった新たなチャレンジをするときにも、障害者支援の専門性や組織力などの「スタンダードな福祉」は当然必要なんですけども、その上に「イノベーション福祉」がプラスされています。現状維持ではなくて、ちょっと変わったことをやりながら、一般企業と戦う意識を持ち福祉を考えていけば、どんどん福祉が変わっていくんじゃないかというお話も印象的でした。名古屋さんご自身は新しいことにチャレンジしないと飽きてしまう傾向があるそうで、いつも新しいことを考えていて、今はアパレル関係にも興味を持っていらっしゃるということです。

会場からアートとしての価値の見極めをどうするんですかという質問がありまして、名古屋さんはアートとしての評価の難しさをお話されました。そして、どう見せるかというところできっかけを作れば商品価値が出来上がっていくということと、職員がどういう風を選んでいくかというのはこれからの課題だとお話されていました。

お二人目の報告者は調布学園の山下千晶さんです。

調布学園は富士見町にある児童養護施設で、山下さんは9年目の寮舎の職員です。施設に入所している子どもの9割以上は親が健在なんですけれども、何らかのトラウマを抱えて入所していて、大人との信頼感が育めていない子が多い。山下さんは子どもに関われる仕事をしたかった、生活を間近で見たかったという思いがあってこの仕事を選んだそうです。親のように関わりたいという気持ちもあるのですが、親というのはお子さんにとっては唯一の存

在なので、親の存在の大切さを意識しながら過ごされているとのことでした。調布学園は30年前に建てられた施設で、昔は六畳に2人、3人のお子さんが生活していて、お風呂も複数のお子さんが一緒に入るような大きいお風呂で、トイレも男女隣接していて、落ち着いて過ごすのが難しい環境でした。グループで生活している中で、いろいろな不都合やこうだったらいいなということがあったので、今、新しい3階建ての建物を建てています。

6名ずつのユニットになり、食事も6名プラス大人の7名ぐらいで食べられる。居室は一人部屋で学習機とベッドが入れられるようになった。トイレも家庭的なトイレ、お風呂も一人で入れるお風呂で、きれいで安心で怖くないとお子さんたちは言っているそうです。家庭での生活により近くなりました。

その居室の学習機とかベッドを買うのに、若い職員さんたちの発想でクラウドファンディングを利用されたそうです。目標200万だったのですが、SNSを活用して196名の方から363万円の寄付があった。そして、調布学園を巣立っていった卒園生からも、少しでも恩返しをしたいという意味合いで寄付をもらった。また、SNSで広い繋がりができたことで広く知ってもらえるきっかけにもなり、地域の方からの寄付もあってトータル700万以上の寄付をいただいた。それは、すごいことだなと思いました。

また、措置入所で親御さんに調布学園にいることを知られてはいけないようなお子さんもいます。プライバシーも大切なので閉鎖的になりやすいけれども、「児童養護施設って障害の人がいるの?」とか、「なんか悪い事をして捕まった人が入っているの?」という誤解も一部あり、巣立ったお子さんたちがそう言われることがあるようで、やはり調布学園のことを広く知ってもらいたいそうです。地域の力を借りて一緒にやっていきたいということで、盆踊りとか、親子映画会とか、会議室を一般に開放したりとかして地域のお子さんたちが遊びにくる。

地域の小学校、中学校といい関係を持っています、お友達もくるといってお話がありました。それと、子どもショートステイをされていて、親御さんの入院とかで一般の方が使えるショートステイがあり、虐待防止の意味合いで疲れちゃったらちょっと預けるみたいな意味でも使われている。また、児童養護施設の担い手が少ないので、地域のボランティアの方を沢山受け入れている、そして、実習生も受け入れていて地域に開かれている、地域に支えられている。そして法人としては地域に貢献していける施設をこれから目指していきたいということでした。児童養護施設の職員は施設に発達障害のお子さんが中にはいて対応してきた経験があるので、それを活かした内容もお母さん達に伝えられたらなと考えているということでした。

入所しているお子さんたちは、様々な経験をしてきているのですが、頑張っている、そういうことを地域に理解されるのに何が出来て何が出来ないのかを考えているということでした。それと、質問の中でSNSのことや、携帯を持たせているかという話がでていて、携帯は高校生から持ち、グループラインもあるんですけども、大人と全く離れたところでやっているわけではなく、大人とも繋がっているなかで使っている。それから、SNSで失敗することもあるけれども、大人と一緒に失敗しながら学んでいく。でないと18歳で園を出た時に多分困るであろう。ということが大変印象的でした。

結城：どうもありがとうございました。いろいろな切り口からそれぞれチャレンジャー達がいるのだなあということを知り、福祉の枠にとらわれない発想や自己表現や自己活用の方法を学ばせていただいたというような気がしましたし、調布学園のあり方も、施設を、閉鎖的な施設にしないという視点から、地域に開かれたかたちで、子どもたち一人ひとりの空間というか多様な居場所を大事にするという事例を聞かせていただきました。それでは、続きまして第二

分科会の小幡さんからの報告をお願いします。

小幡：第二分科会の報告をさせていただきます。お一人目の発表者、ちょこネットの杉山さんから産後うつ、自殺、虐待予防策としての子育てカフェ運営の実践を報告していただきました。

ご自分の出産経験、子育ての経験を経た時にこんなサービスがあればいいよねとか、こういうことがあったらもっと子育てが上手くいったかもという思いがあり、その思いを他の方に伝えたい、それが子育てカフェの運営のきっかけになったというお話がありました。その中で、産後うつ、自殺、虐待といった子育て中に陥りそうなところは実は妊娠から産後の一年間が非常に多いというお話がありました。私、その話を聞いた時に自分はどうだったのかな、どのようなかたちで育児に協力をしていたのかなという思いの中、背筋がピンとなるような瞬間が何度もありました。

一番ショックだったのは、育休が苦しいということ。すごく響きました。仕事を休んで子育てに専念できるよね、だけではない。質問の中にもありましたが、24時間、ずっと子どもの面倒をみる、これは苦難です。確かに休みだけでも、休めてないよねということ。その中の支援の一つがこのカフェなのかなという印象を持ちました。仕事を休んでしまうと仕事の同僚さんとの繋がりが消えてしまう。保育園で自分と同年ぐらいのママがいればいいのかもかもしれませんが、自分より10歳上、10歳下となった時に自分の世代と全然違う話が出てしまう。そうするとなかなか自分の悩みを言いづらくなってしまう。そこにも孤立があるのではないかな。それを解消するために、子育てカフェがあり、かなりの数の方がご利用されているという話がありました。

そのような中で運営をしていくというところに目を向けていくと、産後一年で保育園に入ると子育てカフェを使っていた方がなかなか、客

として戻ってこない。カフェの必要性はあるけれど、どうやって維持継続していくのかということをもすごく悩まれている。また、カフェの中では、来たお客さん同士が仲良くしなさいね、ではなく、来た方が何となくフィーリングで一緒になったり、何となく同い年なのかな、何となく子どもが同じぐらいなのかな、というところで、最初は「個」だったものがだんだん「グループ」になっていきます。

そして今はスマートフォンで情報があふれかえっていますので、どの情報を信じていいかわからない、その時に身近にこれってどうなのと聞ける場所ってというのが、この「a o n a」なのかなというふうに感じました。

また、会場の方からお一人で子育てをしているけれども、「a o n a」を利用していない男性へのアプローチについて質問がありました。それに対し、アウトリーチはちょこネットさんだけの力ではどうにもならないので、市だったり、近隣の方だったり「あの人、お一人で育てていて大変そうだね、ちょこネットさんのこういうところがあるから教えてあげようか」というような地域の連携というのは、やはり必要な部分なのではないかと感じました。

もう一例目はファーストケア調布の池野上昇さんの報告でした。池野上さんは介護現場にずっと携わってこられ、ケアマネージャーとしてときわぎ国領に移り、その後自分で事業所をたちあげました。その中で、一番印象に残ったのは、ケアマネとして一年目で仕事を覚え、二年目で本当にこれでいいのだろうか、といった漠然とした不安、疑問というのを抱えながら仕事をしていて、ついには業務中でも仕事から帰る時でも思ってしまった。「何かきっかけがあったんですか？」と聞いたら、「きっかけは特にない。なんとなくそう思った、漠然とした不安感、疑問感というのがあった。」と。池野上さんは問題意識というものをもちになっていったところがすごく印象的でした。池野上さんの人と人とを繋ぐというところでは、団体と団

体を繋ぐ連携の部分に着手したところが大きなポイントだったと思います。今年2回目のちょうふ高齢者応援大会がありまして220名以上の方が参加しました。この大会を作るために調布市内で活動しているいろいろな団体に「こういうことをやりたいので是非集まってくれないか」とお声掛けをして、団体と団体を繋いでいった。自分の仕事もありながら、その団体に挨拶に行くけど、そこに居ないから会えず、また行くが断られる。そして四回目、五回目ようやく会えて話が出来た。といういろいろな苦労があったと思いますが、「同じ方向をみて同じ方向に進んでいくことが何かをするときには重要なんじゃないかな」、とおっしゃっていたのがすごく印象に残りました。

そして、そのテーマとして、「安心して暮らそうわが街ちょうふ」を掲げて三回目も四回目も実践していきたいということをおっしゃっていました。

ですので、第二分科会では産後のおぎゃーから始まって、高齢のグランドフィナーレに近い方たちに対しての支援をどうしていくのか、それは各団体や各個人が1人1人でやるのではなく、グループになるところがあればグループが一つになって、調布市民になにか還元ができるのではないかという発表でした。第二分科会の報告は以上です。

結城：どうも、ありがとうございます。僕も最初、育児っていつも自分を育てる「育自」に繋がるかなと思っていたのですが、いろんな人から支えられることによって、自分も育っていくのですね。家事分担をなかなか日本の男性はやってくれないと批判される立場としては耳の痛い話もありました。

それから、池野上さんの地域活動、団体連携の問題というのは何を連携するのかいつも悩みの種ですけど、非常にうまい仕掛けを考えられています。基本的には同じ方向に向かって、同じ目的に向かっていくところを共有させていくという、そういう方向性を明確に打ち出すこ

とで繋がっていく。普通は利用者を真ん中にしてみんなが取り巻いているのですが、同じ方向に向かって行くのだという道筋。つまり、進んでいく方向性をしっかり作っていったということが僕は、非常に感銘を受けたところです。どうも、ご報告ありがとうございました。

結城：はい。続いてワークショップの報告を遠藤さんからお願いします。

遠藤：ワークショップについては、少し説明してから内容について報告したいと思います。

フォーラムは昨年度までは、基調講演と三つの分科会で構成されていましたが、参加者同士で交流を図ったり、報告を聞くだけでなく自分の考えや実践を発言するなどして、主体的に参加できるプログラムをとということで、今回のワークショップが企画されました。フォーラム全体のテーマが「福祉現場の文化をつくる担い手とは？～現場を変える、私が変わる～」ですので、支援者の育ちに繋がるようなワークショップをしたいということで、首都大学東京の長沼葉月先生に相談しました。そして、今回の「よい実践を振り返る」というテーマで行いました。

ワークショップの参加者は市内の福祉職員16名です。4つのグループに分かれて言いっぱなし、聞きっぱなし、セルフヘルプグループでよく使われますよね、そういうスタイルで行い、「最近職場であって良かったこと」、「その職場で良かったことの土台にあるものはなんなのか」、それから「これからしたいこと」をインタビュー形式にして発表しました。中身はスタッフ同士とのことや、利用者とのこと等の話ができました。スタッフ同士では親睦会を開く、横の繋がりを作る、縦の繋がりでも上司と良いコミュニケーションをするということがありまして、職場、職員同士での関係をどう良くしていくかという事で日々、楽しく働きながら仲良くなるのが良い循環に繋がるのではないかとありました。やはり、利用者とスタ

ッフが楽しむということ、そこから雑談をしたり、挨拶をしたりと目配せで気持ちが伝わる関係になっていくという事でその背景には利用者との信頼関係を作る努力というか、そういう職場の風土を大事にしているという話がありました。

それから職場内での人との関係の中でも、例えば、スタッフが他のスタッフが出勤する前に職場の空調管理をしたりとか、少しの気遣いですね、そういうところから始まるものもあるんじゃないかなという話もありました。

日々振り返ると、自分のここは良くなかったなとか、利用者と関わる中でここ失敗したな、というものってたくさんあると思うんですね。日々の中ではそういうネガティブなものに引きずられてしまったり、それを家に持ち帰ってしまったりはよくあると思うのですが、今回のワークショップはダメなところ、失敗したところじゃなくて、自分が実践していること、実践しているということを意識していなくても出来ている良い事ってたくさんあるということなんです。そういうポジティブな面に目を向けることによって、自分はこういう事を大切にしていたなという自分の心情も分かります。

今回のワークショップで良かったのは、ワークショップをすることによってグループの中で共有するわけですね。一緒にそういう気持ちになって、そういう目標を持つことはとても大事なことでそれを持ち帰ることが出来る。そして、こうしたい、やってみたいなという気持ちになれるってことがすごく大事だったんじゃないかなと思います。

先生の話の中でも、最後のまとめにありましたが、福祉の制度でも、どんどん新たな事が増えていくのでやることはどんどん増えていくわけですね。実践の中でやっていかなければいけないことが増えている中で、本当に大事なことというのが失われてしまったらもったいないということがとても印象的でした。

日々振り返るなかで失敗もそうですけど、できていることをどう伸ばしていくかということ

も大事なのだらうなと思います。4グループの中でそれぞれ、グループのメンバーに対してメッセージを最後に書いて交換しあいました。なかなか普段の生活のなかで褒めてもらうってことはないですね。どんなにいい実践をしてもそれが伝わらなかったり、他の人が思っているものが違えば、それは違うってことになってしまう。でも、認めてもらう体験って大事なので、こういうワークショップはよい機会だったと感じました。

結城：ありがとうございました。やっぱり現場で働いている人たちが、今最後におっしゃいましたけれども、互いに褒め合う、認められるという経験がなかなか無いようです。ケアの担い手であり続けるためには承認欲求が高いわけでは無い中で報われる経験ばかりではないかも知れない。けれど、日々疲れる中で自分を認めながらを褒めること、自分の中の自己肯定感とか自己効力感を高めていくためには、自分を褒める力もすごく大事です。さらに他人からも承認される、認められる経験ってすごく何か頑張ってるね、いいじゃん！って言ってもらえるってことは次に向かってモチベーションを上げていくのにとっても大事なことなんじゃないかなと思います。

それがより良い実践の積み重ねに繋がっていくようですからワークショップの狙いはそこにあったのかなと気づきました。今回、それが確認出来てとても良かったです。

それでは、これまでの報告を受けた中で、参加されなかったところも一応共有できたかなと思います。もしも補足がありましたらお願いします。

名古屋：進藤さんの報告で、特に付け加えることはないのですが、ファーストステップでやってきた実践を簡単に報告させていただいたんですけど、変わってることをやるのが好きな人間というところもあって報告者に推薦されたと思うのですが、これからもまた変わったこ

とにチャレンジをしていきたいと思うだけです。

山下：調布学園の山下です。緊張していて何をしゃべったかよくわからない状態でしたが、進藤さんにうまくまとめていただきありがとうございます。

虐待のニュースは日々取り上げられてはいるんですけども、児童養護施設の認知がすすんでいまずので、それを今日お伝えできればと思っておりました。ありがとうございました。

杉山：杉山と申します。ちょこネットでカフェを運営しております。小幡さんにしっかりと受け止めていただいて、それが凄く気持ち良かったです。ありがとうございました。

ほんとに耳が痛いと言われている男性に思ってしまったことは反省しています。逆の立場で言えば、女は分かってないよ、と言われても仕方がないかなと思っはおりますのでやはり、男性で頑張って子育てをしている方もいらっしゃることですし、皆さんにとって開かれた場でありたいと思っております。ありがとうございました。

～質疑応答～

結城：フロアの方からもう少しこのところは聞きたいとか、質問があればいただきたいと思いますが、いかがでしょうか？ワークショップを出られた方、手を挙げてください。

参加者：ワークショップに参加させていただきました。今の報告を聞いて、なるほど、そういう事だったのかと思いました。

インタビュー形式でやったんですけど、一つ目の質問「最近職場であったよかったこと」で思いっきり詰まってしまいました。でも、思考を変えて「職場であった楽しいこと」というように思考を変えたらやっと思せるようになりま

した。最近、なかなか仕事が上手いかず大変なことがあったのですが、顔見知りだけでも普段そんなに深く話をしない方々に同じグループで褒めてもらえて良かったです。明日も頑張れると思いました。

参加者：ファーストステップさんのアートは、福祉の場所がただの場所ではなくアートを軸にしている。利用者さんのことをアーティストさんと呼んでいたことがとっても印象的でとてもいい実践をなさっているし、次も何かやりたいたいとおっしゃっていたので、どういうくらみなのかなというのが楽しみで市民として応援したいという気持ちになりました。

調布学園さんの話も山下さんの人柄がよくよく伝わってきて、一緒に失敗して成長していけばいいという言葉は、よくやっぺいらっしゃるのだな、と思いました。自分が変わって社会が変わる？社会はやっぱり変わる必要があるよね？ということも改めて思いました。児童養護施設のことと同じ市内に住んでいる私たちがもっと知っていく必要があるし、私が住んでいる場所でそれを知ってもらう方法をまた、考えたいなと思いました。

何回か出させていただいているのですが、私は福祉の現場にいませんし、別の仕事ですがここでのやりとりが私にはとても参考になるので、いいなと思って参加しております。ありがとうございました。

結城：ありがとうございます。また、続けていけるといいですね。

参加者：第二分科会に出ました。杉山さんから、孤立を避けたい、予防をしたいという思いがあったというのを伺ったのですが、分科会で発表された方々というのは、先駆的な取組みをされていていらっしゃる方々なので、その背景にどういう思いがあったのかについて是非、教えてください。それを聞くことで自分が守りに入ってしまうようになった時、こういう方々がいた

んだぞという励みになるといいなと思いましたのでよろしくお願いします。

杉山：話してみたら結構みんな同じことを考えていた、先ゆく先輩と思っていた人も同じことを悩んでいたというところがあったので、やる意味があるのかなと思えた。あと私の話を聞いてくださる人が調布にいっぱいいたということですね。

名古屋：原動力は変わったことをやるのが好きということですかね。杉山さんがおっしゃっていましたが、僕らは障害者のサポートをする職業をしているので、サポーターとしての役目も当然考えています。今回の報告の中でも述べさせていただいているのですが、自分の夢の実現とリンクさせながら進めていることが原動力です。僕は追い詰められると力を発揮できるタイプのもので、自分を追い込んでいくと、なんかすごくいい力がでているのかもしれないですね。

山下：自分は9年勤めています。同じ部署で子どもたちの成長を見守っているんですね。小学校の時からみている子が今、高校生になり、どんどん卒業している子をみていて、施設に戻って来たときに、あの時ああやって言ってくれてうざかったけど良かったよ、というようなことを言ってくれることが、今の原動力に繋がっているのかなと思います。

～フォーラムの総括～

結城：ありがとうございます。発表者とファシリテーターの方、基調講演の西郷先生から話を伺いながら、僕なりに思ったことを最後に少しだけお話させていただきます。

子どもの頃から僕の中では校長室は入っちゃいけない場所だと思っていたんですけど、西郷

先生のようにフランクな形でさまざまな子どもの存在を認めていける力に衝撃を受けました。そして、今回のシンポジウムは、去年同様に、他分野、他領域の人達から福祉実践の現場の担い手として、刺激を受けようじゃないかということが実践フォーラムにおける考え方の基盤でもあったので、継続しながらその視点を繋いできて良かったなと思いました。福祉っていうのは子どもからお年寄りまで、実に多様な生活問題を抱える人間の生き方というものを尊重しながら個々人の課題解決に立ち向かう姿勢が必須条件であると思います。そういう社会環境が子どものときから高齢期まで生涯にわたって整備されているといいなと実感しました。

今回のシンポジウムのタイトルは「福祉の現場のチェンジを創るチャレンジャーとは誰か？」にしました。今回、福祉実践の担い手であるさまざまな人たちの発表を聞きながら、現場も社会も少しずつかも知れませんが、チェンジ・変わりつつあるかなと感じました。さらに何か支援してあげなきゃという視点から、上手く言葉に出来ないのですが、何か一緒に変えていこうという視点の転換が生まれつつあるように感じました。その意味で、多様性っていうのは、一人ひとりを大事にすること、個別性・特性を大切に丁寧に取り扱えるということなのです。今回の報告を伺いながら、それが一つの変化（チェンジ）に繋がってきているのではないかなと実感しました。いわゆる「共生」という「共に生きる」ということは、同時に「共にいる」ということです。つまり、「共存」の意味について深く考えさせられました。人には、「いろんな居場所があっていいんだ」、「いろんな形で共にいていいんだ」という柔軟な発想が、例えば、「廊下にいてもいいんだよ」というように西郷先生の講演の中でも紹介されていました。

施設の中での暮らしをみると、いろんな子どもたち若者たち、高齢者がいるのに、こうじゃないなきゃいけないという画一的な思考に陥りそうなのところが様々にあります。たしかに、集団生

活の間ではある程度の規則（ルール）は必要なのだと思います。僕としては、衝撃的だったのは、分科会で小幡さんから、今の80代になったばかりの人達はどんな音楽を聴いていたか想像してみてくださいというお話があって、まさか、童謡じゃないよな、美空ひばりかなと考えたんですけど、実はビートルズを聴いていた世代なのだと聞いて、「えっ！そうか。」と思いました。まさに時代と共に高齢者のイメージは当然、変わってきているなと思って。自分の中の妙な固定観念っていうものを取り払わなければならない。今こそ、アップデートして、福祉の現場をチェンジしていかなきゃいけないって思いました。

それから、今回、全体の話聞いて改めて思ったのは、人間の多様性、個別性を認めて、共に生きて共存して、歩み続けるためには、「寛容さ」みたいなものが大事だなと。つまり、僕たちの中に「寛容さ」があれば「人の弱さや未熟さを受け入れ大切に出来る」のだと思います。しかし、僕たちの社会が寛容さを失っていく中で生き辛くなって思う人たちが増えてきているのではないのでしょうか。僕は「人間の弱さ」の部分を含めて様々な考え方、価値観を認め合う社会の重要性を福祉から発信していかなければならないのではないかと改めて勉強させていただいたように思いました。人のことを思いやる「やさしさ」というのは、人のことを憂える…で「優しい」と言葉になるわけですけども、まあ、人の為（ため）と書いて「偽り」と読むなんてことはよく言われますけど。優しさっていうのは、人の事を「憂いる、心配する」ということだと思っています。僕の中ではこんな感じで「自分自身を認めて、自分のことを大切に思えて、自分の弱さを認める力」が必要なのであって、そうでなければ「他者のことも大切に思えないし、福祉の対象者の弱さを受け入れる、強さを獲得できない」のではないかなと思っています。

僕は、チャレンジャー（挑戦者）であるべき私たちが変化を起こす時代が、来ているのではないか。今、「不寛容な社会」の中で福祉の現場は利用者の生活を支援する立場であり、私たちも支援は必要だと思います。と同時に十分支援を受けない、愛されない人間は人のことも愛せないのだと思いました。そういった意味で、お互いを大切に思い合える環境はいい支援に繋がっていくのかなと思います。調布にはその様な「支援の基盤」が出来つつあると、今日、分科会やワークショップでの雰囲気やシンポジウムでの報告を聞いて思った次第です。最後に総括していただいた方達に一言ずつ「まとめ」のお話をさせていただければと思います。

進藤：第一分科会のお二人の話を聞いて思ったのは、基本的なルールや枠組みはあるけど、そこにとらわれすぎないで、柔軟な気持ちを持って、尚且つ、結城先生がおっしゃったように人の弱さとか自分の弱さとかにも向き合いながら、寛容になっていく。そして、愛がある支援をするということをお二人の実践から感じました。また、お二人とも好きで仕事をされている。困ること、大変なこともたくさんある中で、その仕事を楽しんで、また、わくわくするところがあるので続けてこられたのだろうなと思いました。夢や昔からしたかったことを叶えること、夢中になれることが人を支えていると思いました。

小幡：西郷先生がお話していた、その人と一緒に3年間楽しく生きようとか、ホームページのAll You Need Is Love ってところで、生まれたての子どももそうだし、お年寄りもそうだし、障がいの方もそうだし、働いている我々も実は愛は必要なんだなって思いました。やっぱり大好きなことをし続けられる、大好きなことの大変さっていうのは乗り越えてやるぜ、みたいな楽しい思い出になるんですけれども、いやな仕事というのは、自分の気持ちがポジティブからネガティブになった時に二乗、三乗に非常に大

変になってしまう。また、山下さんが言っていた調布学園の卒園者が「あの時うっとおしかったけど、今はありがたうと思っているよ」とか、たぶん福祉の良さって、物には代えられないワンシーンだったりするのかなと思うんです。基本的には愛があって自分が満たされているから、その愛を人にも渡せるし、渡せられた人はそれを返せるし、といったようなそんな会だったんじゃないかなというふうに思いました。

遠藤：福祉の現場では相手とか、人を無くしてチャレンジをすることって無いと思うんですね。相手がいるからチャレンジが出来るんだろうなと思います。一人でチャレンジするってなかなか難しくて、仲間ってというのは利用している方や、スタッフですが、仲間がいるから一緒にチャレンジ出来ると思います。また、良い実践を広めていくということもとても大事ですので、このフォーラムが続けばいいなと思いました。

結城：今日の実践フォーラムをとおして福祉の仕事とか対人支援の仕事は、僕の『ケアのフォークロア』という本にも書いておいたのですが、やっぱり「ほんとうに大切なものは目に見えないんだよ」と『星の王子様』の中に出てくる有名な言葉を思い出しました。ほんとに大切なことは目に見えない、目に見えることって、意外とそんなに大切なことではない。私たちは、「目に見えない物を大切にすることの本質が求められ、問いかけられている時代」なんじゃないかな、と思っています。最後にちょっと、チャレンジャーが引き起こすチェンジを通して、「WE ARE THE CHAMPIONS！」と思える社会にしたいなと思いました。つまり、私たち誰もが互いに福祉の「チャンピオン」なんだって認め合える環境の中で日々頑張って切磋琢磨していけばいいなって思いました。今日は、ご参加頂きどうもありがとうございます。



基調講演
西郷孝彦氏（世田谷区立桜丘中学校）
～ポカリダンスに応募～



～ワークショップ～
長沼葉月氏「よい実践をふりかえる」

～託児室の様子～
子育て中の方にご参加いただくため、
託児ルームを設けました。
当日は6人の子どもが利用しました。



第3回ちょうふ福祉実践フォーラム実施概要

- (1) 開催日時 令和2年2月9日(日) 13:00～17:30
- (2) 会場 調布市こころの健康支援センター
- (3) 主催 社会福祉法人調布市社会福祉協議会 調布市福祉人材育成センター
- (4) 対象 福祉に興味のある方
- (5) 目的 実践報告を通じて、福祉実践の理念や価値に基づく知識や技術を参加者が学びあうことを目的とする

(6) 内容

① 基調講演

基調講演	「子どもたちの“楽しい”のために ～公立中学校のチャレンジ～」
講師	西郷 孝彦（世田谷区立桜丘中学校長）

② 分科会

分科会	第一分科会 「新たな価値を創造するチャレンジ」	第二分科会 「人と人をつなぐチャレンジ」
ファシリテーター	進藤 美左 (NPO 法人調布心身障害児・者親の会)	小幡 真也 (医療法人社団桐光会フロリアル調布)
報告	名古屋 一 (NPO 法人ファーストステップ)	杉山 裕子 (NPO 法人ちょうふ子育てネットワーク・ちょこネット)
報告	山下 千晶 (社会福祉法人六踏園児童養護施設・調布学園)	池野上 昇 (居宅介護支援事業所ファーストケア調布)

③ ワークショップ

テーマ	「よい実践をふりかえる」
講師	長沼 葉月（首都大学東京都市教養学部）

④ シンポジウム

シンポジウム	「福祉の現場文化のチェンジ（変革）を創るチャレンジャー（挑戦者）とは誰か？ 「私から始まる「私たち」のチャレンジとチェンジ」
ファシリテーター	結城 俊哉（立教大学コミュニティ福祉学部）
シンポジスト	進藤 美左（NPO 法人調布心身障害児・者親の会） 小幡 真也（医療法人社団桐光会フロリアル調布） 遠藤 嘉浩（調布市こころの健康支援センター）

(7) 参加者数

※基調講演 92名

※分科会参加者数（延べ人数）

・第一分科会「新たな価値を創造するチャレンジ」 . . 30名

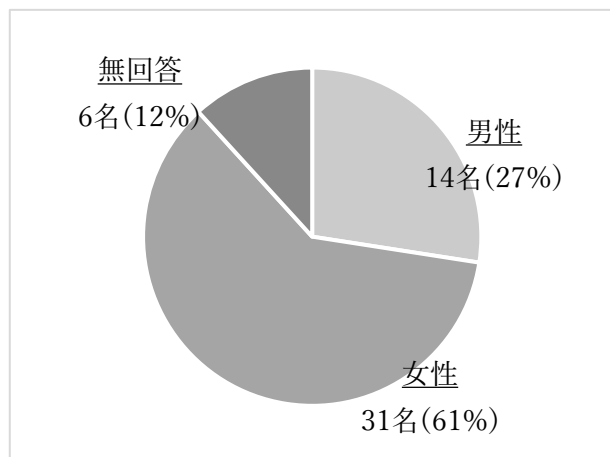
・第二分科会「人と人をつなぐチャレンジ」 23名

※ワークショップ

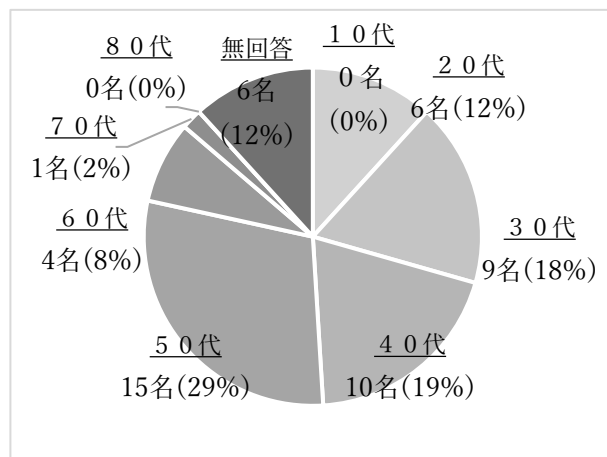
・「よい実践をふりかえる」 16名

(8) 参加者概況（有効回答者51名のアンケートで集計）

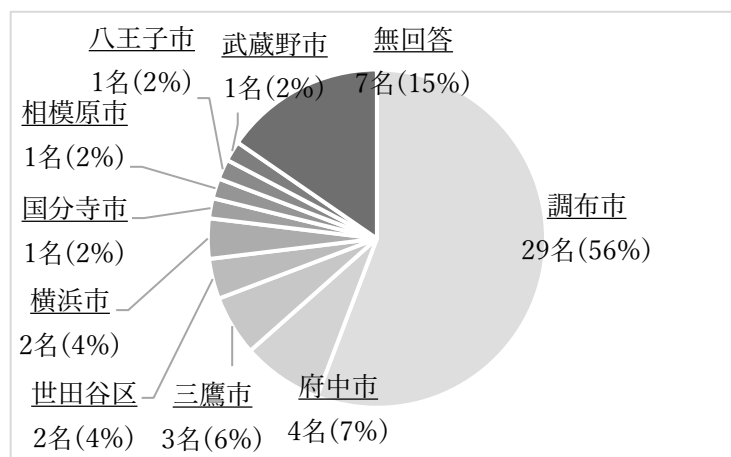
① 性別



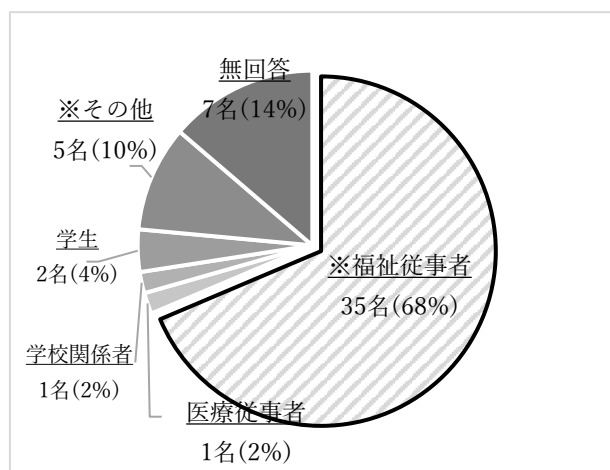
② 年代



③ 住所

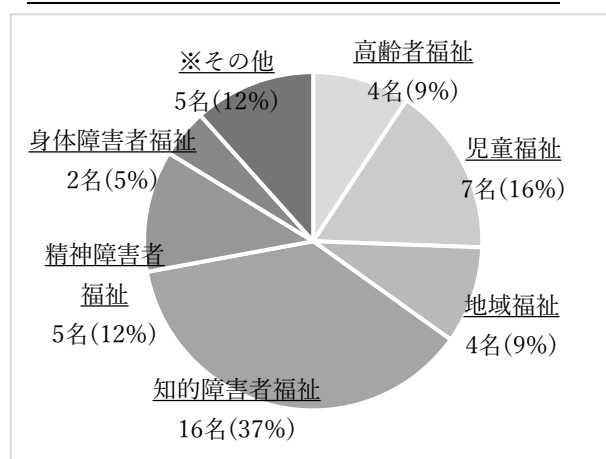


④ 属性



※その他（NPO 法人、障害者の親、市民、保護者、親の会）

※福祉従事者35名の属性（複数回答可）



※その他（民生児童員1名）

第3回ちょうふ福祉実践フォーラム企画会議メンバー

※敬称略

氏名	所属
結城 俊哉	立教大学コミュニティ福祉学部（調布市福祉人材育成センター運営委員長）
伊藤 文子	調布訪問看護ステーション（調布市福祉人材育成センター副委員長）
小幡 真也	医療法人社団桐光会 フロリール調布
亀田 良一郎	社会福祉法人調布を耕す会 しごと場大好き
進藤 美左	NPO法人調布心身障害児・者親の会
嵐 祐子	調布市こころの健康支援課
大光 加奈子	調布市こころの健康支援課

（1）企画会議

第1回	令和元年 7月29日（月）	参加者：7名
第2回	令和元年 8月27日（火）	参加者：6名
第3回	令和元年 9月30日（月）	参加者：7名

（2）全体打合せ（企画会議メンバー＋報告者）

第1回	令和元年11月 5日（火）	参加者：10名
第2回	令和元年12月23日（月）	参加者：10名

（3）各分科会打合せ（報告者＋ファシリテーター＋職員）

第1分科会	令和2年 1月16日（木）	参加者：4名
第2分科会	令和元年12月23日（月）	参加者：4名

調布市福祉人材育成センターの取り組み

市民向けの取り組み

福祉人材の養成～福祉で働く人を増やす～

資格研修

【主に高齢者福祉で役立つ資格】

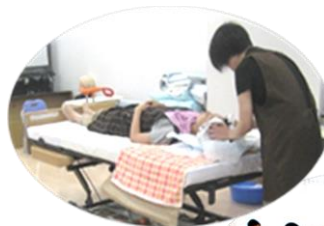
- ・介護職員初任者研修
- ・調布市高齢者家事援助ヘルパー養成研修

【主に障がい者福祉で役立つ資格】

- ・同行援護従業者養成研修
- ・重度訪問介護従業者養成研修
- ・知的障がい者（児）移動支援従業者養成研修
- ・行動援護従業者養成研修
- ・医療的ケア支援者養成研修（特定の者）

就労支援

- ・保育のおしごと相談・面接会（2回）
- ・福祉のしごと相談・面接会（1回）



普及啓発～福祉に関心を持つ人を増やす～

- ・講演会の開催
- ・HP や広報紙を用いた情報発信（福祉資格、研修、求人情報など）

福祉従事者向けの取り組み

専門性の向上～福祉で働く力をつける～

階層別研修

- ・「初任者研修」、「中堅職研修」、「管理職・施設長研修」など、福祉職としての経験年数や職層に応じた研修

専門研修

- ・「記録の書き方」、「虐待防止」、「子どもの発達について」など、福祉従事者としての専門性の向上を目指すテーマ別研修

ネットワーク形成～支え合い、働き続ける～

- ・ちょうふ福祉実践フォーラム
分野や事業所の垣根を越え、職員同士がお互いの実践を学びあう機会



調布の福祉で

活躍する人を育てる

調布市福祉人材育成センター

(調布市こころの健康支援センター別館2階)

〒182-0024

調布市布田 5-46-1

TEL : 042-452-8180 FAX : 042-444-3376

(月～金 9:00～17:00)

MAIL : jinzai@ccsw.or.jp

HP : <http://jinzai.chofu-city.jp/>

MAP



交通アクセス

【電車】

京王線調布駅 中央口より徒歩12分

京王相模原線多摩川駅より徒歩8分

【バス】

小島町三丁目下車 徒歩3分

調布駅入口下車 徒歩6分

運営

社会福祉法人

調布市社会福祉協議会